

# 米国の人種問題：Part IV：都市部の 貧困問題の実例と社会福祉制度について

日吉和子

1995年7月8日のワシントン・ポスト紙に“Rosa Lee Cunningham, Subject of Series, Dies”<sup>1)</sup>と言う見出しで写真付きの死亡記事が第1面に載りその記事は別のページにまで続いていた。その58才のアフリカ系アメリカ人女性はワシントン・ポスト紙がその前年の秋に特集した“Rosa Lee’s Story”と言う題名で「アメリカの都市の中で貧困と生存についての一代に渡る話」<sup>2)</sup>と言う副題がついたアフリカ系アメリカ人の都市に住む貧困層が抱える問題に関するドキュメンタリー記事の中で取り上げられ、一躍有名になった人物である。しかもこの記事でワシントン・ポスト紙のレオン・ダッシュ記者（記事を担当）とルシアン・パーキンズ（写真担当）がジャーナリズムの部門で1995年のピューリッツァー賞を受賞した事もあり彼女の死亡が第一面に掲載されることになったと思われる。この記事の評価に関してはこの特集の最初のページにワシントン・ポスト紙によるコメントが囲み記事の形で付け加えられているがその中に要約されているし、この記事を読めばそれは自ずから分かると思う。

「.....彼女の人生は政策立案者達が彼女やそのように沢山の他のアメリカ人達をそのように長い間閉じ込めてきた貧困のサイクルを打ち破ろうとする断続的な努力に対して失敗してきたその荘厳な建物（\*連邦議会議事堂）から遠く離れてはいない荒廃した地区の中での苦難の半世紀に及んでいる。／ローザ・リーの8人の子供の内2人を含む彼女の親類の多くが彼等が直面する障害を克服し、アメリカ社会の主流の中でしっかりとした足場をどうにか確保することを成し遂げた、それで彼等の相対的成功は彼女の身の上話をますます理解するのを重要にさせている .....彼女の身の上話は彼女が持った選択肢であり、彼女がした選択であるが、統計資料がただ示唆するだけの物、つまり人種差別主義、貧困、文盲、薬物乱用と犯罪の相互連結となぜこれらの状況がしばしば一つの世代から次の世代へと次々と存続するのかを理解する機会を与えてくれる」<sup>3)</sup>

まさにこの記事には統計資料上の数値では感じ取ることができない例えたった一人の人物とその身内という限られた世界だとしても現在進行中の、生きた貧困の衝撃的実例を我々の目の前に突き付け、それについて何か考えるようにと我々に迫ってくるものがある。しかもそれはアフリカ系アメリカ人社会の最下層の貧困世界の多くの前途が現状とはそれ程変わりそうにもない徴候を各所で伝えてくるのである。その貧困の世界の中で生まれ育ったゆえに、またはその世界の中

で余りにも長い時を過ごし過ぎたゆえに、そこから脱出しようとする気すら起こらないのではないかと思わせる人達、特にその貧困の中で時には呆れて苛立ちを覚えさせる程ルーズに感じられる物の考え方や言動を見せながら遅く生きているこのローザ・リーとその貧困に押し潰され自滅の道を歩んでいるようにしか思えない彼女の子供達の存在はダッシュ記者も述べている様に米国の都市部の貧困問題の複雑さとその解決の困難さを改めて痛感させるのである。

ところでこの記事をもそのように強烈な印象を与える内容にした理由の一つにレオン・ダッシュ記者がこの記事の中で明らかにしているように彼自身がニューヨーク市のハーレムで育ったアフリカ系アメリカ人であるという要因が挙げられると思う。ローザ・リーは彼女と同じ人種の人によりインタビューされたことでより率直に自分自身の過去を話すことができたであろう。その上ダッシュ記者が4年以上に渡る歳月をこのプロジェクトに捧げ、その間彼女の家を訪問したり彼女の外出に付き合ったり相談に乗ってあげたりしながら彼女の日常生活の中に入り込み彼女の信頼を勝ち得る事ができたのもそもそもこの人種的要因に負うところが大きいのではないかと思われる。ある調査によると電話による世論調査ではその電話を受けた人がその調査員が黒人であると感じたか白人であると感じたかで質問に対する答が違ってくると言う。例えば「アメリカ社会はすべての人に対して公平ですか」と言う質問に対して黒人の調査員が相手だと思った黒人の解答者の内14%が公平だと答えたのに反して白人の調査員に質問されたと感じた黒人の解答者はその31%が公平だと答えたと言う。同じく「アメリカの司法制度は黒人に対して不公平ですか」と言う質問に対して前者は84%がそうだと答え、後者は72%であった<sup>4)</sup>。この調査結果からもインタビューする人の人種要因がインタビューされる側の心理に与える影響は推測できるであろう。

一方彼がローザ・リーや彼女の子供達の有りのままの姿をとらえ、それを読み手の心をその様に揺さぶる記事に仕上げる事ができたのは彼のジャーナリストとしての才能だけでなく彼が黒人中産階級で育ったという要因も関係していると感じられる。彼は南部の貧しい生活から北部やその他の都市部へ「20世紀の最初の50年間に」<sup>5)</sup>どっと移動してきたアフリカ系アメリカ人の子供や孫達が一方は都会での様々な人種差別を克服して彼のような貧困とは無縁の生活を得て、他方ではローザ・リーのように「いつまでも続く貧困や薬物中毒や卑劣で暴力的な犯罪や周期的に刑務所に入ることにより特徴付けられた生活に陥ってしまっている」<sup>6)</sup>ことに関して「いつも当惑を感じてきた」<sup>7)</sup>と述べている。また彼は自分の人生と彼女の人生を比較し、「ローザ・リーが1960年代初めに8人の子供達の世話をしようと奮闘していた時私はマンハッタンにある高校に通う十代の少年であった。彼女が1966年に窃盗の罪で初めての禁固刑に服していた時私はハーワード大学で大学の学位を得ようとしながらワシントン・ポスト新聞社で見習いとして働いていた。彼女が70年代の中頃首都ワシントンのノースウェスト地域の路上でヘロインを売っていた時私はそれらと同じ通りの幾つかに与えるヘロイン売買の破壊的な影響について書いていた」<sup>8)</sup>と述べ、これ程異なる人生は無いであろうと付け加えている。それはまさに彼女と同じ人種集団に属

してはいるが近年とみに彼女のような都市部の貧困層との間に物理的・心理的距離を感じ始めている黒人中産階級の人の発言である。そのような黒人中産階級の批判的な目を通して報じられているのでローザ・リーのような生き方に対してその内部にしっかり潜り込んで調査しているが感情的にある一定の距離を置き、ある意味ではその集団の外の世界からローザ・リーや彼女の子供達の生活を観察し伝えることができたのである。それはやはり自己の生活や人生と比較しながらその様な記事を読む人の視点に通じるものがあり、あたかもその場でそれらの出来事を見ているかのような臨場感を彼等に持たせ、その記事をよりインパクトの強いものにさせたと思われる。

1990年9月5日にダッシュ記者が初めてローザ・リーの家を訪問した時彼女の家同居していたのは8人の子供（当時39才のボビー、38才のロニー、37才のアルビン、36才のリチャード、34才のエリック、32才のパティ、30才のダッキーと名前が明かされていない29才の娘）の内なんと5人で、彼等に加えて孫が4人同居していた。当時リチャードは仮釈放違反のかどで刑務所にいたのでそこにはいなかっただけであった。ボビー、ロニー、リチャード、パティ、ダッキーの5人全員がヘロインかコカインの中毒者で、友人の家と刑務所とローザ・リーの家の間を行ったり来たりして時には路上で生活していた。ヘロインを打つ為に同じ注射器を使い合っていたのが原因とされているがボビーとパティはローザ・リーと同様に HIV 陽性でエイズに感染してもいた。名前が明らかにされていない当時7才、11才、13才の3人の子供の母親であった末娘もまたコカイン中毒でコカイン所持で11か月の刑期を終えたばかりであった。彼女は当時コカイン中毒を治し仕事をしようと努力していた。後にそれに成功したので彼女の要請で名前が明らかにされていないのである。そこにいなかった残りの二人、アルビンとエリックだけが犯罪歴もなく薬物を使用したり密売に加わったりしたこともなく仕事と家庭とアルビンの場合にはローザ・リーの8人の子供の中で唯一自分の家を、しかも中産階級の住宅地に持っていた<sup>9)</sup>。まさに同じ家庭環境に育ったはずのローザ・リーの子供達の生き方が2対6の割合で貧困脱出派と貧困継承派に分かれている点をダッシュは指摘し、その相違をもたらした物が何であるのかと再び問い掛けている。2派に分かれた子供達も全員が当然のこととして母親であるローザ・リーと家庭や周囲の影響を受けたことは確かである。ローザ・リーの人生を辿りながらその答えを考えてみよう。

ローザ・リーの祖父母の Thadeous Lawrence と Lugenia Lawrence はノース・カロライナ州のリッチ・スクウェアにある綿花農場で親の代から働いていたシェアロッパーで、祖父はそれ以外に密造酒を作って貧しいシェアロッパーの収入を補っていた。後に首都ワシントンに移っても密造酒造りに関わっていたと言われ彼等が家を所有することができたのはここからの収入のお蔭に違いないと言われている。娘の Rosetta も彼女が十代になる頃までには既に農作業を手伝っていた。そして Earl Wright と結婚し15才の時にローザ・リーの兄の Ben を出産している。その年の1932年に彼等が働いていた農場が折りからの大恐慌の影響で綿花の値段が20分の1

に急落したのを受けて閉鎖される事になりたまたまシェアロッパーを探してその地域を旅行していたメリーランド州のタバコ栽培者と出会い、彼等はメリーランド州セント・メアリーズ郡にあるマードックス・タバコ農場へと移ってきた。そこでの生活は食べるものにも事欠く貧しさで1935年には娘のライト夫妻が、それから1年もしない内に残りのローレンス一家が農業を捨て首都ワシントンに移り住むことになった。そのような中ローザ・リーは1936年に首都ワシントンで生まれた。彼等は連邦議会議事堂から1マイルも離れていない地域にある電気も無く、トイレが家の外にあるような家に住んでいた<sup>10)</sup>。グツシュの説明によると当時南部から首都ワシントンにやって来た元シェアロッパーはほぼ同じ様な状態にあったそうである。当時の首都ワシントンでも人種分離待遇が依然として行われており黒人が得られる仕事は限られていた。製造産業が無いこの地域では政府関係の仕事が主であったがそれらは南北戦争後に移ってきた解放奴隷達の子孫で既に中産階級を形成していた人達により占められていた。親類もなく友人もなくコネも教育も農業以外の技術も無い彼等がまずまずの収入を得る事は難しかったのは当然である。

ところでローザ・リーが9才の頃には既に母親は社会福祉小切手を受け取っていた事はローザ・リーが母親にその小切手を盗んだと疑われてしたたかぶたれ、その出来事により母親との確執が始まった話からも判明する<sup>11)</sup>。母親はその小切手を受け取りながら昼間は女中として働き、夜は家の台所で作った夕食を売ってライト家に入ってくる現金収入のほとんどを稼いでいた。父親はアルコール中毒になるまでは道路の舗装工事をして働いていたが肝臓の病気で彼女が12才の時に死亡した。母親は22人の子供を生み、その内11人が成人しただけであった。

ところでローザ・リーの母親が生んだその子供全員が夫の子であったのかどうかは述べられていないので定かではないが母親は1932年に第一子を生み、1936年生まれの子ローザ・リーが12才の時に父親が亡くなったとすると16年間ぐらゐの結婚生活で母親が子供を22人も生むのは少々不可能であるし、さらにローザ・リーには15才年下の Jay Roland Wright という名前の弟がいる<sup>12)</sup>と言う事が分かっているのでその弟はどう考えてもアール・ライトの子供ではないのは確かである。彼女が1950年初めあるパーティーで知り合った肌の色の薄い男の子との関係を強固にするだろうと考えて肉体関係を持ち13才で妊娠し、結局父親の違う8人の子供を持つようになったのもこのような家庭環境が何らかの影響を与えていたと考えられるかもしれない。

1950年の11月、ローザ・リーはまだ14才の時最初の子供である Robert Earl Wright を出産した。そして一つには彼女がまた妊娠したのが原因で彼女はその後学校には戻らなかった。15才の時に別の十代の男の子との間にできた第2子を、そして16才の時に彼女の3番目の子供の父親で、彼女の母親のロゼッタが勧める Albert Cunningham と母親の元から逃げ出したいがために結婚したが4か月後に彼女の不倫を発見した夫に殴られたことから母親の家に帰ることになり<sup>13)</sup>まさに学校どころではなかった。その後も彼女の家族は増えていった。1950年代中頃にパーティーを含む3人の子供の父親となる David Wright と出会ってその二人の関係は1960年代の初めまで続

いたが結婚はしなかった<sup>14)</sup>。そして彼女は最後までカニングムの名字を名乗っていたのでその後再婚したとは思えないが結局5人の男性との間に8人の子供を生んだとダッシュ記者は述べている。それは7人の子供が婚姻外で生まれた事を意味している。しかもその全員を彼女が養育していたのであった。これは前にも述べた様にこの人種集団にはしばしば見られる家族形態として考えられていて首都ワシントン地区ではAFDCを受けている家庭の子供の5人の内4人が婚姻外で生まれており全国的にもその様な子供は増加しているし1950年にアフリカ系アメリカ人による全出産の内16.8%が結婚していない母親によるものであった<sup>15)</sup>ので特にローザ・リーが道徳的に言ってふしだらであったとは言えないであろう。しかしローザ・リーの母親は結婚してから子供を出産したのに反して彼女は母親が出産した年齢よりも若い14才と言う年齢で未婚の母になった事が彼女が母親よりも問題の多い貧困生活を送る原因の一つとなったのではないかと推測される。

前にも述べた様にローザ・リーは出産後に学校には戻らず7年生の時に中退した。彼女の母親は彼女自身学校には行ったが思春期になった時には畑でフルタイムで働いており読み書きができなかった。その上当時の黒人女性が見付ける事ができる仕事は女中仕事の様な家事労働しかないと経験上知っていたので学校教育には余り関心が無く、ローザ・リーにも家事をもつぱら教えていたぐらいである。ローザ・リーは小学校の3年生の時には既に両親や自分も含めて11人の子供達の洗濯物を洗うのに毎週数時間費やしていた。彼女は「私の母は宿題をしたかと尋ねなかった。学業は彼女にとって重要でなかった、しかもそれは私にとって重要ではなかった」<sup>16)</sup>と述べている。ロゼッタの両親も正式な学校教育を受けてはいなかった<sup>17)</sup>。学校教育が重要視されないとされる家庭環境が彼女が読み書きができないで学校を中退した大きな原因と考えられる。

彼女が文盲であるとダッシュ記者が知ったのは1991年であった。1990年の秋常習していたヘロインが原因で激しい発作に襲われてから4回目の発作を起こしたローザ・リーがその発作を押さえる為に処方された薬の服用指示書が読めなかった為に薬を受け取ってから数週間して薬の飲み過ぎから病院に入院した事からであった。ダッシュ記者はこの事により彼の書いた記事をローザ・リーは他人に読んでもらわない限り何が書かれているのか分からないだろうし、「彼女は彼女を知らない赤の他人をだますには十分なある程度の単語が何であるか識別できるが新聞自体は長い一連の解読できない暗号のようなものである」<sup>18)</sup>と述べている。この文盲状態はローザ・リーと彼女の祖父母と母が共有していただけでなく少なくとも娘のパティーに受け継がれている事がこの記事の内容からも分かる。実に4世代に渡っている点は注目に値するであろう。パティーは自分の兄の名前の“Richard”と言う文字すら読めない程であった<sup>19)</sup>。パティーの場合ローザ・リーはパティーが7才か8才になるまで学校に入学させなかったという親の怠慢からそれは始まったと言えるであろう。それで年齢は11才でありながら小学校の3年生で、その上字が読めなかったし学校にもちゃんと毎日通わなかったがローザ・リーはある意味でそれについては無関心であった。学校には無関心と言えば彼女の子供達の中で一番最初にヘロインに手を出したロニーは

15才で7年生に在籍している時へロインを始めそれが原因となり学校を8年生の時に中退した。ローザ・リーはそれにも注意を払った様子はなかった<sup>20)</sup>。ロニーの場合はどの程度字が読めるのかははっきりしないが彼が退学するのを黙認したローザ・リーの責任は大きいと考えられる。高校を卒業していないだけでも自活できるだけの給料を支払ってくれる仕事を得るのを難しくしているのにほとんど字が読めないとなると貧困のサイクルから抜け出す可能性はほとんど残されていないと言えるであろう。この4世代に渡る文盲はその様な教育的無関心が主な原因であるが学校にも一部原因があると思われる。

ローザ・リーは1942年の秋に小学校に入学したがその最初の学年で読み書きへの苦労が始まり4年生の時に他のクラスに紛れ込んだことがきっかけで彼女は自分が「物覚えの遅い児童」のクラスに入れられていたと知る。そして彼女が興味深い授業だと思った通常のクラスに入ることを拒否されたことからその後彼女は学校をサボるようになる。それにもかかわらず彼女は5年生、6年生に進級し、1949年の春に彼女は年齢が理由で中学校への進級を許可されたのであった。こうして彼女は読み書きも足し算引き算も満足にできないままある意味ではほったらかしの状態に置かれていた。それで彼女の妊娠を知った学校当局が彼女を休学させたのをきっかけに彼女は学校に戻らなくなった<sup>21)</sup>のである。ここで彼女が興味を抱いた授業が取れるような配慮が学校側にあったなら彼女は少なくとももう少し読み書きができたかもしれない。

ところでローザ・リーの息子のエリックもまた読むことに関して問題がありそれを隠す為に学校で問題を起こしていたが別の学校に転校してそこで出会った教師が彼が理解するまで教えてくれたことから自分の読み書きに関する問題を告白した。その時エリックは特別な練習問題を与えられそれをやり遂げた。そして彼はその教師から学習する能力があると言われ喜び、朝早くに起きて学校に行ったと言う。この事実はエリックが学ぶことに対して意欲的な努力をするタイプだと証明しているだろう。しかしそれは1年しか続かなかった。それは彼が原因では無く学校側に原因があった。その翌年エリックは別の中等学校の7年生になったが彼はローザ・リーと同じ様に手に負えない物覚えの悪い生徒達のクラスに入れられてしまったからである。そこで彼は学校に行かなくなると言うローザ・リーと同じ道を辿りそうになった。しかしここで彼は一人のソーシャル・ワーカーに出会い学校に戻され、そしてそこで再びそのソーシャルワーカーに読み書きの問題を告白した。彼をテストした結果学習不能者ではないと知った彼女は彼を18カ月もの間土曜日に家庭教師の元に送り込み読み書きを習わせてくれた点がローザ・リーよりは幸運であった。彼はその二人の人物が彼により良い生き方と「人生の肯定的面」<sup>22)</sup>と自分を大切にすればできることがあると言う事を教えてくれたと言う。この同じソーシャル・ワーカーはそもそも押し込み強盗で少年鑑別所に入れられていて帰ってきたばかりのリチャードの様子を見に来てエリックやパティニーに出会ったのであるがパティニーの人生もリチャードの人生も変わらなかった事から推測すると彼等と似た者親子であるローザ・リーの場合も普通のクラスに入ることができたとして

も、良い家庭教師やソーシャルワーカーに出会えたとしてもその好機を生かせなかった可能性は多分にあると思われる。

ローザ・リーにしるエリックにしるそれぞれの親が読み書きに苦勞する状態にあり小学校に入学する前に読み書きの初歩を日常生活の中で習える環境では無かったであろう。それで入学の段階で回りの者達よりも読み書き能力が劣っているのは当然の結果であるが学校側はその低い言語運用能力から判断して物覚えの悪いクラスに自動的に彼等を入れてしまったのかもしれない。その他の点で知的能力がある場合それは自尊心を傷付け彼等の持つ将来の可能性をこの段階で損なってしまう行為に匹敵するかもしれない。エリックの場合も別の助けが与えられ無かったらローザ・リーと同じく文盲状態または半文盲状態のまま学校を退学していたかもしれない。これは文盲状態の明らかに二次的要因による継承である。文盲、もしくは半文盲の人が貧困層に多い原因としてこのプロセスの存在は無視できないであろう。しかし学校は貧困からの脱出の機会も与えているのである。

アルビンは学校で自分とは違う中産階級の子供達と知り合い自分の生きている環境と全く違う家庭や生活様式があると知った事で、社会福祉を受けている家庭に配られる無料の食料品の入った施しもの袋をローザ・リーは天からの贈物と考えており周囲の人達も同じ様に考えていたにもかかわらず8才の時理由はどうであれ彼は“embarrassment”<sup>23)</sup>つまり気恥ずかしいもの、決まり悪いものと感じる価値観の相違を学校で学んでいた。そして教育の重要性、必要性を彼の人生の中で初めて繰り返し話してくれた一種の“role model”の様な教師に出会ったのも学校であった<sup>24)</sup>。この学校を通してエリックとアルビンは犯罪の道やヘロインの世界にも進まない物の考え方を学べたのである。ローザ・リーの時代にも中産階級の子供達はクラスの中にいたが彼女は物質的な面だけに関心が向けられた結果それは彼女に盗みを始めさせたに過ぎない<sup>25)</sup>のである。ここにローザ・リーとアルビンの人生に相違をもたらした原因の一つを見て取れるであろう。

アルビンとエリックの二人もそれぞれ16才と14才の時に付き合っていた女の子を妊娠させてから高校を中退していた。しかしアルビンは18才で軍隊に入り、その女の子と結婚し、高校卒業同等資格を得て大学のコースも幾つか受けたりと責任のある行動と教育上の努力をした結果除隊した後も着実に雇用され続けているのである。エリックの場合も軍隊に入り失業青少年の職業訓練センターで1年訓練を受けた。しかしその技術を生かさず歌手になろうとして失敗し職を転々とする事になった。それから首都ワシントンの公共事業局で街路掃除人としての定職を得ることができた。彼はその地位に満足せずそこで働く一方で大型装置の運転の仕方を学び別の公共団体での良い仕事へと転職し1992年に財政上の問題から首切りに会うまで勤め続けた。その後も一時的な仕事をしながら職探しをしている。彼は14才の時に妊娠させた女の子との関係を続け1982年に彼女がヘロインを使用していると知った時別れて彼が息子を育てている。驚いたことに彼女にヘロインを教えたのはローザ・リーであった。その事実によりローザ・リーが周囲の人々をトラ

ブルに巻き込んでいる状態がはっきりと分かる<sup>26)</sup>。アルビンもエリックもローザ・リーの価値観や生活様式に批判的な心を持ちそこから抜け出しより良い生活を求めて絶えず努力する姿勢と勤労の精神、そして家庭への責任感があったからこそ貧困から脱出でき安定した生活を得ることができたのである。したがってローザ・リーもその他の6人の子供達も皆学校を中退しているがその人生結果が2派に分かれた原因はこの辺りにあると言えるであろう。29才にしてローザ・リーの末娘が自分の生き方を変えてそこから抜け出そうとする努力をし始め一応それに成功したと言う事は他の同じ様な状況にいる人でも貧困から抜け出せる可能性があると言う事を証明している。

ところで十代で未婚の母となり、実の母親との確執から彼女から逃げ出す手段を結婚に求め数か月でそれに失敗して母親の元に引き取られたローザ・リーが次に求めた手段が母親に支払われている彼女の分の手当てを自分自身で貰うことであった。字の読めない彼女は当時付き合っていた男友達にその変更手続きの為の用紙を書いてもらって母親に黙って手当てを自分で受け取れるようにしてしまった<sup>27)</sup>。そもそも自分で仕事を見つけて母親から独立しようと考えなかった点、そして母親に支払われている自分の分の社会福祉手当ては当然のごとく自分の物であり自分で使いたいと思い、既に福祉手当てを受け取ることに何のためらいも感じていなかった様子などから彼女の社会への経済的依存度の強さが推し量られると思う。社会福祉を受け取りながら母親からの「自立」とは自分でやりたいことができる自由な生活を意味しており、世間一般的な勤労による経済的自立精神はどれも彼女には無かったように思われるのである。とにかく彼女と同じ様に十代で未婚の母になって社会福祉手当てを貰い始めた人は社会福祉からもっとも離れそうにない人<sup>28)</sup>であると言われていて現在 AFDC の制度を見直そうとする動きの中でその議論の中心に置かれているぐらいである。十代の未婚の母達を親または保護者と同居させ AFDC を受けている間に生まれた子供に対しては社会福祉手当てを支払わない規定を改革案に盛り込もうとする考えが最も優勢である。ワシントン特別自治区では学校に通う規定すら盛り込まれている。これは“learnfare”(学ぶの learn と社会福祉の welfare という言葉の合成語) と呼ばれる福祉改革案で AFDC を受けている十代の親だけでなく同じく AFDC を受けている子供達も学校にちゃんと通わせようとするもので88年の家族扶養法で既に導入されているがそれをもっと強化し出席日数次第では手当てを削減する罰則を盛り込もうとしている。これは実際にニュージャージー州、ウィスコンシン州、そしてオハイオ州で実施されている<sup>29)</sup>。下院を通過し上院の承認を待っている“The Personal Responsibility Act of 1995”<sup>30)</sup>では18才以下の十代の未婚の母には社会福祉手当てを認めないと明言しているぐらいである。その問題が深刻化している事がこれらの改革法案を見ても明らかである。とにかくローザ・リーは一生社会福祉に依存し続けたのでその問題の最悪な例と言えるかもしれない。しかし1969年から78年の10年間の統計調査から AFDC を受けていた黒人女性が世帯主の家庭の子供の88%が8年以上貧困状態にあり、その平均継続年数は20年以上であった<sup>31)</sup>と言う数値から判断するとローザ・リーは黒人の貧困地域ではそれ程悪い例と



は言えないのである。

一方彼女はデイビッド・ライトとの間に3人の子供までありながら、しかも彼は仕事を持ち定収入があったにもかかわらずローザ・リーは彼の給料だけでは暮らして行けないと考え一緒に暮らそうとはしなかった。「当時の社会福祉は男性と一緒に住むことを許可しなかった。そういう訳で私は彼と別れたのです。我々と一緒に暮らそうとしたけれど社会福祉が我々にそうさせなかつたろう」<sup>32)</sup>と彼女は結婚しなかった理由を説明している。確かに AFDC を受ける事ができる資格条件は死亡、遺棄、別居、離婚により両親の内のどちらか一人からの扶養が奪われた場合と言う条件で家の中に男性がいる場合には手当てを受けることができない“man-in-the-house”規定がありそれが家族崩壊を奨励しさえしていると指摘されてきた。それで1961年に両親の揃った家庭で父親に収入が無い場合も受けられるようにした (AFDC-UP と呼ばれる制度)。しかしそれは各州への強制力が無かった25州とコロンビア特別自治区のみが色々な条件付きで採用していただけであった。それで1988年の連邦政府の家族扶養法で各州にその制度が義務付けられ男性が家の中にいても手当てを受けれるようになった結果現在 AFDC を受けている家庭の7.2%が結婚した夫婦による世帯になっている。しかし AFDC を受けている女性が正式に結婚した場合夫が例え最低賃金しか支払われない仕事に就いていても AFDC は減額されることになる。テキサス州では例えば夫の年収が1万ドルとすると AFDC とフード・スタンプとメディケイドを合わせた可処分所得の10%が減額される。それが15,000ドルだと25%、2万ドルだと29%減額される。ニューヨークの場合はそれぞれ10%、41%、42%減額される。そして AFDC を打ち切られた場合最も大きな痛手はメディケイドを失うことだと言われており<sup>33)</sup>この現状が AFDC を受けている母親達が結婚へ踏み切るのをためらう要因だと指摘されている。しかしこのメディケイド制度は1965年に正式に確立されたものであり、現行のフード・スタンプ・プログラムもまた64年に議会で可決されたが当初は額面よりも低い金額でフード・スタンプを買い取る形式で貧困家庭ではそれを買う余裕がほとんどなかった。そして1977年になって現在の無料配布となった<sup>34)</sup>。それで当時のローザ・リーにとってはこの二つは結婚を邪魔する要因でなかったのは明らかである。それでローザ・リーの言葉を額面通りに受け取れば彼女は立派な“man-in-the-house”規定の犠牲者に見えるかもしれないが未婚の母から出発し立て続けに3人の男性との間で3人の子供を生み、母親の監督から逃げる為に結婚し、彼女の浮気が原因による夫の暴力によりたった4か月で離婚し、そして母親と一緒に生活から逃げる為に今度は社会福祉手当てを自分で受け取れるように手続きしてしまった過去を考慮するとデイビッド・ライトと結婚しなかった事最大の原因はその福祉規定ではなかったのではないかとと思われる。

ところで子供を持ち社会福祉に依存する女性が社会福祉から離れる良い方法の一つとして結婚が挙げられているのである。これは現在の福祉改革の流れを受けて既に幾つかの州により試みられている“wedfare” (結婚するの wed と社会福祉の welfare の合成語) と呼ばれる改革の手初

め的政策の中に見られる。基本的には AFDC を受けている結婚していない親を子供または子供達の実の親（この場合ほとんどが父親であるが彼等がそもそも子供の養育の義務を果たさないの  
でその子供達やもう一方の親が AFDC に頼って生活することになっている訳で彼等と結婚しても AFDC から離れる事が期待できないので）以外の人と結婚させることにより AFDC から離れさせようとするものである<sup>35)</sup>。ワシントン・ポスト紙の “One Mother’s Answer Rejected by Daughter / In 1959, Marriage Was Ticket Off Welfare”<sup>36)</sup> という記事の中でも同じ様な考え方が支持されている。1959年当時高校中退で AFDC に頼っていた 6 人の子供を持つ離婚した 29 才の母親がアルバイト先で知り合った男性と付き合う内に妊娠しその子の社会福祉手当てについてその男性を伴って福祉事務所に相談に行った時彼は相談員の面前で彼が結婚して面倒を見ると宣言した。その時彼女は愛していないので結婚できないと拒絶したが彼に結婚すれば次第に好きになると説得され結婚し彼はその後着実に雇用され続け現在は引退して彼女は夫の年金で幸福に暮らしている。一方彼女の娘は同じく高校中退で社会福祉手当てを受ける 3 人の子供を持つ 41 才の母親であるが一度も結婚せずこれからも結婚はしないと宣言している。彼女の 3 人の子供の 3 人の父親の誰一人として養育費を支払わず彼女が一人で育てているが結婚により社会福祉から離れるのではなく自分の力で離れたいと宣言している。その意欲は素晴らしいが母親の言葉からはそれが実現しそうでない印象をその記事は伝えている<sup>37)</sup>。この記事は「解き放たれているがほとんど自立していない：夫がいない事は社会福祉からの脱出を面倒にしている」<sup>38)</sup> という記事に付随しているものでこれは女性が男性に依存して生きるのが良いと宣言しているのではなく一つの家の中に他に収入を稼いで子供の世話を手助けしてくれる人がいればそれだけ社会福祉に依存する貧困生活から脱出するのが容易になると宣言しているのである。ここでの例を考えると当時同じ様な状況にいて同じ様な定職を持つ男性との結婚の可能性があり “man-in-the-house” 規定だけの障害しか持たなかったローザ・リーは経済的に自立し子供達に父親のいる家庭を与えられるかもしれない機会を努力もせず捨てたと言えるかもしれない。後で述べるがこの頃には既に彼女は違法とは言え福祉手当て以外の収入の道を得ていたので経済的には結婚はそれ程魅力的ではなかったのかもしれない。

1966年彼女が窃盗の罪で 8 か月の刑に服した後その間子供の世話をしていた母親の元に戻ったローザ・リーは母親が彼女が服役した事は彼女が母親として失格である証拠だと社会福祉事務所に告げたと知る。彼女は母親が子供の養育権を彼女から奪いそれと共にその子供達に対して支払われている社会福祉手当て（AFDC の事）を得たいと考えていると確信して急いで子供を連れて母親の家から出たと言う話<sup>39)</sup> は母親との確執の悪化の例とするよりも彼女が子供達の手当てすら当てにして生きていた証拠とすることができるであろう。見方によっては社会福祉が目的で子供を持つ人であったと解釈されそのような行動でもある。この行動は彼女の社会福祉への依存度が後戻りできない程度まで進んでいた事を証明していると思われる。

またこの記事の中で特にパティエーの場合には顕著であるが社会福祉手当が本来の生活費としてではなくコカインやヘロインなどの薬物購入に使われている事実がはっきりと語られている。ダッシュ記者は1992年のある日ローザ・リーの住んでいたワシントン・ハイランズ地域でコカインの十代の売人達が外で福祉小切手が各家庭に郵便屋により配られるのを待っている一方でローザ・リーのアパートの部屋の中でもパティエーとダッキーの借金を回収しに来た Two-Two と Man と呼ばれていたクラックの売人の二人が待っている光景に出くわした。そしてローザ・リーの話によると1991年の9月1日にも同じ様な出来事が起きていた。パティエーは当時252ドルの社会福祉手当を受けていたがそれはその前日、または前々日に既に届けられていて彼女は「それを数時間ですべて使っていた。その前の月にクラックを買う為にローザ・リーに借りていた100ドルを返し、例の二人の売人よりも先にパティエーを見つけた数人の売人に金を支払い、残りをさらにクラックを買うのに使った」<sup>40)</sup> 為に例の二人が30ドルのクラックの借金（その他にダッキーとパティエーの男友達の借金、それぞれ80ドルと150ドルもあった）を取り立てに来た時パティエーはローザ・リーの寝室に隠れなければならなかった。このパティエーの例と通りで待っている売人達の存在はこの地域に住んでいる社会福祉手当を受け取っている人の中には確かに世間で言われている様にそれを悪用している人がいる事を物語っている。しかしこれが理由で、または薬物中毒の治療を受けなければ彼等の手当を打ち切ると取締強化してもそれは彼等がコカインを買う為の金を得る手段として犯罪に走る恐れを増大させるだけであるかもしれない。不足分を売春で補っているパティエーなどはその良い例である。

とにかくこの窮地に陥った子供達を救ったのはローザ・リーであった。彼女は自分が貰っていた“disabled poor”に対する補足的保障所得プログラム〔医学上の問題や職を得る可能性を制限する技能の欠如などがあると認められた者や治療を受けている薬物やアルコール中毒の人や65歳以上で収入のほとんど無い人などに対する現金での公的援助プログラムで“Supplemental Security Income” (SSI) と呼ばれている。1972年に社会保障法の改正で成立し74年から実施されている〕からの月422ドルの手当てからその借金を返すとその月を暮らしてゆけないと言う理由でそこから払いたいとは思わなかったが彼女は子供達を助けてやりたいと思い Two-Two に紹介してもらいクラックの供給元の人物に会い300ドル分のクラックを買いその人物の言葉に従って2倍の価格で売ってその借金を返済しようと考えた。彼女のアパートが密売所になり、何をしているのかに気付いた14才の孫娘の「おばあちゃんに刑務所に戻ってもらいたくない」<sup>41)</sup> と言う言葉も無視してパティエーやダッキーに客を集めさせた。彼女はその二人に懇願されて売り物のクラックを与えたり、客に安く売ったりした結果元手の300ドルすら回収できなかった為結局はその借金を彼女は自分の懐から払わなければならなくなった。そしてそれ以来そのクラックの売人達はパティエーやダッキーが払えないクラック代金をローザ・リーに支払ってもらうようになった<sup>42)</sup>。当然彼女のSSI手当から全額では無いかもしれないが一部が支払われたと考えるのが

妥当である。これも立派な社会福祉悪用の例になる。ところでこの話を彼女は「多少誇りを持って」<sup>43)</sup>したとダッシュ記者は書いているが本来ならば決して自慢できる様な状況では無いにもかかわらずローザ・リーにとっては子供達を自分が助けたと言う行為が誇らしく思える点に彼女の性格上の問題を見て取ることができる。そこには場当たり的で手っ取り早く金を稼ぐ為にはその手段を選ばずの精神がはっきりと示されているだけでなく社会福祉手当を当然のごとく受け取っている彼女にとってはそれが結局はコカイン購入の借金返済に使われた事に対して後ろめたさや罪悪感を少しも感じていない考え方が見て取れる。またこれが彼女の子供の愛し方としてもそこには彼女の持つ価値観の歪みが現れている。明らかに14才の孫娘の持つ、世間一般的な善悪の判断力に彼女は欠けているし、また彼女はこのような状況にいる子供達を助けることが結局は彼等のヘロイン中毒を助長することであり、彼等が将来ヘロインに関係した犯罪に巻き込まれる可能性を高めてもいる事に考えが及ばないのである。

驚いた事にローザ・リーはこの他にも社会福祉制度を悪用しているのである。彼女はメディケイドを受けているが1991年8月にバス事故で背中を少し痛めた時鎮痛剤と精神安定剤の処方箋を貰って以来時々一回の処方です手可能な60錠をたったの50セント支払うだけで手に入れ、彼女が毎日朝食を食べるファーストフード・レストランで鎮痛剤を1錠1ドル、精神安定剤を2ドルで売っていた<sup>44)</sup>。これも利用できる物はなんでも利用して稼ぐ姿勢が如実に現れている例である。ところで現行の社会福祉改革は公的援助を受けている人達を働かせる方針をはっきりと打ち出しているがローザ・リーも働くことは働いた経験があるのである。

彼女は5番目の子供を出産したばかりの1956年20才の時初めて仕事を持ったがそれはナイトクラブでのウェイトレスの仕事で彼女が女友達と一緒にダンスをしたり酒を飲んだりする為に行っていた場所でその経営者にスカウトされた結果であり彼女が経済的自立を目指して積極的に探して得た仕事ではなかった。彼女は子供を母親に預けて働いていた。社会福祉手当だけでは足りない分を補う現金収入が魅力であったことは確かであるがどうも彼女はそこで働くのが「楽しくてわくわくさせる」<sup>45)</sup>から働いていたのではないかとダッシュ記者の説明は仄めかしている。そこで彼女はもっと簡単に金を稼ぐ方法に出会う。それはヘロインの密売であった。彼女自身はヘロインの怖さからその後19年間はヘロインに手を出さなかったが密売人に誘われてその店の中でそして後に自宅や路上で密かにヘロインを売り始めた。都市部の貧困地帯の抱える問題点の一つとこの時点から直接関わりを持つことになり彼女の生活はますます犯罪と背中合わせの混乱状態へと嵌まり込むことになった。ヘロインは後に彼女の子供達も巻き込み彼女やボビーやパーティーをエイズに感染させ、ボビーや彼女の命までも結果的には縮めてしまうことになった。

1961年までに8人の子持ちとなっていた彼女は2番目の仕事を得たがこれがストリップ・ダンサーの仕事であり、前回同様に彼女の仕事活動には違法行為による稼ぎの手段が伴っていた。今回は売春に手を染め始めた。彼女は客を8人の子供達が居る自分のアパートへ連れて行きさえし

た。そして当時11才であったボビーに「おまえは私の手助けをしなくちゃいけないよ。おまえ達皆を食べさせるためにこれをしているんだよ」<sup>46)</sup>と言って客をアパートの部屋のドアの所で出迎えて客から前払いで受け取った金を隠すように指示していただけでなく驚くべきことに彼女はパーティーが寝ているのと同じ部屋の中で売春をしていたのである。そしてパーティーによる話から彼女は連れてきた客に請われて当時11才であったパーティーに母親の2倍の料金で売春をさせた事も発覚する<sup>47)</sup>がこの出来事などはまさに親としての責任を放棄した子供への性的虐待にも通じる恐ろしい犯罪行為である。後にパーティーは自分のヘロイン代を稼ぐ為に売春をするようになるがそのヘロインにしても売春にしてもきっかけを作ったのは母親であるローザ・リーであった。彼女は“worst role model”と呼べるであろうが彼女の貧困継承派の子供達は彼女の後に従ってしまったのである。その後に従わなかったエリックは後に「あなたは何かに値する価値観を我々の心の中に徐々に染み込ませることなど決してしなかった」<sup>48)</sup>し、学校にゆく重要性も教えなかったし「あなたが我々に教えた事はもしごまかすことができるならばごまかすことは良いと言う事である。もし盗みをして旨くやりおおせれば盗むことは良いと言う事。もし誰かを食い物にすることは旨くやりおおせれば良いと言う事である」<sup>49)</sup>とローザ・リーを責めたがまさにこの言葉の中にローザ・リーの価値観、物の考え方を見て取れるであろう。前にも述べたようにローザ・リーが教えてくれなかった価値観をエリックとアルビンは学校を通して学んでいたのである。

ローザ・リーのこのような混乱状態の犯罪人生は彼女が9才の時に学校の昼食の時に売られるクッキー代として級友達が持ってきていた金を彼等の机から盗むことから始まった。そしてその盗みの行為はエスカレートして48年の夏、彼女が11才の時週2回夕方にアフリカ系アメリカ人向けの新聞を一軒一軒売り歩いて回っている時その家々の中にこっそり忍び込んで台所のテーブルの上にしばしば置かれていた札入れの中から金を盗んでいた。その年の秋には彼女の一家が長年通っていた教会で彼女が日曜礼拝中に案内役を始めコート・ルームで手伝いをするように割り当てられたことからさらに盗みの対象範囲が広がった。そのコート・ルームに預けられたコートのポケットの中に金が入っていることに気付いた彼女は「もし彼等がその金を欲しいと思っているとしたら彼等はあるポケットの中に金を入れておかないだろうというような気が」<sup>50)</sup>してそれで彼女はその金を盗み始めたと言ったとダッシュ記者に話している。それはたった11才の段階で既に非常に自分勝手な解釈で他人の金を盗み、それに対して罪悪感を感じない人間が出来上がっていた事を示している。コート・ルームでの盗みが発覚し、そこの教会の牧師が盗んだ人は名乗り出るように教会員に告げてから数週間は教会に近付かないようにし、再び案内役として教会に戻ってからは小銭だけを盗むようにするという自己防衛は既に思考回路の中に形成されていた。「彼女はしばしば盗んだ金をどうしたらよいか分からなかった」<sup>51)</sup>とダッシュ記者が書いている様に彼女は当初は何か金が必要なもので、つまり彼女が後にしばしば口にした「生きる為に」やむを得ず盗んでいたわけでは無かった。

そして彼女が小銭を盗むことから始めて万引きへと盗みの活動を広げたのは彼女が7年生の時であった。彼女の家は貧しかったので母親が買ってくれる洋服は流行遅れの古着であった。彼女はこの頃既に異性の目を気にして容姿の点で自分は不利だと感じ始めて洋服でお洒落をして人目を引こうと考えていた。そんな時女友達から借りた新しいスカートを着て学校に行き昼食の時にその友人のちょっとした頼みを断った事からその友人がローザ・リーのスカートが彼女からの借り物であると口走ってしまい、その席にいた級友達にローザ・リーは笑われてしまい彼女の心が深く傷付けられたと言う。それなのに新しい洋服を買ってもらえる金銭的余裕が家にはなかったので万引きと言う手段に訴えることになったのである。彼女はスカートとブラウスを自分の着ているスカートの中に隠して店の外にまんまと気付かれずに出ることに成功してからは「他の女の子達が持っているものを持つんだと堅く決心した」<sup>52)</sup>と言っている。それは手段は何であれ欲しい物は手に入れる精神である。この時も「生きる為」ではなく異性の目を引き付けたいと言う自己中心的欲望を満たす目的から始まっていた。

そしてダッシュ記者は彼女の万引き癖は母親の中途半端な態度から助長されたと暗示している。ローザ・リーはポビーを出産してからそれ程たっていない頃教会に盗んだスカートを着ていこうとした。母親は彼女が見慣れないスカートを持っているのに気付き問い詰めた時ローザ・リーは「ある店から盗んできたの。母さん、どうかそれをその店に返しに行かせたりしないで」<sup>53)</sup>と答えたのに対して母親は激怒していたが娘が真実を話したのでその事については何も言わないが二度と再び盗品を家の中に持ち込まないようにとはっきりと告げただけであった。母親からぶたれると思っていたローザ・リーが驚いた事には母親はさらに「それを着てごらん。それを着たおまえの姿がどんなか見てみよう」<sup>54)</sup>と言ったのである。ローザ・リーは少なくともこの段階では自分が母親に叱られるような悪いことをしていると心の底では感じていたことは確かである。しかし母親はその後も気付く度にローザ・リーに尋ねたが彼女は盗んでいないと言い逃れ、母親も嘘とは知りながらそのまま見逃していた。その結果彼女は万引きで捕まり19日間少年院に送られる事になり彼女の正式な犯罪歴が始まるのである。それでも彼女の万引きは続き母親はその万引きを止めさせる2度目の絶好の機会に巡り合えたにもかかわらずかえってローザ・リーの万引きを公認し、それを助長する言動を示してしまった。

母親との関係を改善しようとローザ・リーはある日スカーフを盗んできて母親にプレゼントした。母親はどこでそれを手に入れたのかと疑うように彼女を見たが彼女がそれは聞かないでと身振り以示すと母親は「ローズ、私はこんな物は持ったことがないわ」<sup>55)</sup>と言って彼女を両腕に抱き締めたと言う。ローザ・リーはそのような母親の反応を「信じられなかった」<sup>56)</sup>とダッシュ記者に告げている。結局母親は盗みは悪いものであると言う道徳観は持っていたし自分では決して盗みはしなかったであろうが娘が万引きをするのを断固として止めさせるだけの、万引きしてきたと思われる品物のプレゼントを拒絶する程強い道徳観念はなかったと考えられる。しかしそ

の母親は少なくとも『何か欲しければその為に働きなさい』<sup>57)</sup>と言っていた一生懸命に働く女性であったとローザ・リーの弟は回想して述べているがこの考えを遅すぎたとしてもその時はっきりとローザ・リーに教え込んでいたら少しは違う生活をしていたかもしれない。

結局その後も彼女は時折万引きで摺まっては全て執行猶予のついた刑を言い渡されていた。しかし1965年にメリーランド州のあるデパートで自分が着ていたぼろぼろのウールのコートと新品の毛皮のコートを取り替えようとして摺まり窃盗の罪で1年の禁固刑となり8か月を刑務所の中で過ごした<sup>58)</sup>。結局1951年に逮捕されてから窃盗だけで8回服役し、他の罪も含めると全部で12回刑務所に行き合計して5年間服役すると言う犯罪歴を持つに至ってしまった<sup>59)</sup>。そもそもローザ・リーとこの記者が1988年に初めて出会った場所が首都ワシントンの刑務所であり、彼女はそこの刑務所付きのカウンセラーによると「彼女の孫達の内3人を食べさせる為にヘロインを売っていて」<sup>60)</sup>逮捕されその罪で7か月の刑期に服していた時であった。そのカウンセラーの言葉はその時も彼女は“to survive”つまり「生きる為に」犯罪行為を行っていたと周囲の人々に信じ込ませていた事を如実に物語っている。これはダッシュ記者が記事の中でしばしば言っている様に盗みやヘロイン売買や売春など違法行為をすることに対してのローザ・リーの弁解の言葉である。ダッシュ記者は「サバイバルという言葉はローザ・リーが彼女の行為を説明する為にしばしば使う言葉であり、彼女がそれ以上の議論を受け流す為に掲げる、戦いによりますます強化された盾である」<sup>61)</sup>と解説している。そして繰り返しになるがこの言葉を受け入れているのが貧困継承派の子供達であり、それに怒りすら感じているのが貧困脱出派の二人であると言うのが非常に興味深い点である。

とにかく1992年1月の段階で月437ドルを連邦政府から受け取っていたローザ・リーはそれ以外の収入を万引きした品物を売るにより得ていた<sup>62)</sup>とダッシュ記者が特に言及するほど彼女の万引きの習慣は彼女の日常生活の中にしっかりと組み込まれていた。しかも8人の子供達を育てる為だけでなく1975年にヘロイン中毒になってからはそのヘロインを買う為にも万引きをしていたほどであり、その上彼女の万引きの習慣は彼女の兄弟や妹達すらも驚かせるほどの量になっていた。ダッシュ記者は既に1990年のクリスマス前のある日に彼女の万引きの凄さを目撃していた。その日に彼女の寝室で大きなショッピングバッグの中身をベッドの上に彼女が空けた時、そこには「60ドルの値札が付いたままの皮の手袋が幾つかと何十本もの男性用コロンや女性用の香水」<sup>63)</sup>が出てきた。それは過去2週間の成果であり、値札は新品の商品だと証明する為につけられたままであると彼は説明を受けていた。彼女はその様に筋金入りの万引きのプロになってしまっただけでなく彼女の息子のアルビンとエリックを除いてその他の6人の子供達も彼女はその世界、つまり「何か欲しければそれをどんな事をしてでも手に入れる」方向に引っ張り込んでいたのである。その一つの例が1968年に起こった。

ローザ・リーはマーティン・ルーサー・キング牧師が暗殺された1968年4月4日に首都ワシン

トンで勃発した暴動騒ぎの中でその略奪に加わっていた。当時17才のボビーが盗んできたと思われる車を運転してきた時残りの7人の子供達に向かって「ようし！ 行きたいのは誰？」<sup>64)</sup>と声を掛けアルビンとエリック以外の子供達を連れて手当たり次第に品物を略奪してきて、その翌日の略奪騒ぎに加わる必要がないほどの物を持ち帰って来たと言う<sup>65)</sup>。ここで彼女は略奪や放火の対象となった店は「客から搾取して『私が持っている金がどんなに僅かであっても』それを奪った『貪欲な』商人達により経営されていた」<sup>66)</sup>と説明し彼女の略奪行為を弁明した。この考え方は白人社会に対する黒人社会、特に貧困層の黒人の間によく見られる被害者意識そのものであり、ロドニー・キング事件がきっかけで発生したロス暴動の際にも繰り返し述べられた見解であった。自分達を搾取している店から略奪して何が悪いと言う考え方である。とにかくその時の彼女の子供達への誘いの言葉から盗みの習慣が既に彼等の生活の中に定着していた事がはっきりと分かる。万引きで8回も刑務所送りになる度にリハビリ・プログラムを受けたにもかかわらず彼女が万引きするのを止めるものは何も無かった<sup>67)</sup>程の彼女には子供が盗みを働くことに関して怒ったり責めたりする気は起こるはずもないし、むしろその行為を暗黙の内に奨励していたのである。

1964年ボビーは押し込み強盗の罪で少年院に送られた。逮捕されるまでの数か月間店や学校に夜忍び込み盗みを働いていたがその最初に押し入ったのは楽器店で2,000から3,000ドル相当の楽器を盗みその盗品の処理の仕方が分からなかったボビーは母親の元に持って行き「さあ幾らか金が手に入るよ」<sup>68)</sup>と言った。当時隣に住んでいたロゼッタが盗品と知って履いていたスリッパでボビーを叩いてどっかに持って行くように怒鳴ったがローザ・リーはボビーを叱ったりしなかった。その反対にローザ・リーは当時働いていたナイトクラブで数名のミュージシャンに盗品の楽器がある事を知らせ全部で275ドルで売りさばきボビーにそれまでに見たこともない金額の200ドルを手渡したそうである<sup>69)</sup>。彼はその後何回も窃盗の罪で逮捕されることになるがかつてローザ・リーの母親がしてしまったようにそれを助長したのは母親となったローザ・リーであった。さらに彼女は自分の子供達だけでなく孫達をも盗みの世界に引き摺り込んでいた。

1991年の1月にローザ・リーは10才になる孫の男の子を連れて中古衣料品店に行き、その子がまがい物のフライト・ジャケットを欲しがった時「もしそれが欲しければ私がそれを手に入れるのを手助けしなければならないよ」<sup>70)</sup>と言って孫に実践的に万引きの仕方を教え万引きに成功した話をダッシュ記者にした。彼女が10才の孫と万引きをした時彼女はシーツを盗んで有罪とされ連邦最高裁判所からの判決を待っている身であり、刑務所に入ることになるという考えすら彼女を引き止めたりはしないとダッシュ記者は半ば呆れながら彼の感想を述べている<sup>71)</sup>。また別の時には孫娘と教会に行く途中で彼女のコートがぼろぼろに思えたので中古衣料品店に行きピンクのコートを孫娘が万引きするのを手助けした事をローザ・リーは話している。そこでダッシュ記者は教会に行くことと盗むことがどうして一緒にできるのかと尋ねている。彼女は暴動の夜の略



奪行為に対して説明したのと同じ様にそこの客はほとんどが黒人でありその白人の店主が彼等をだまして高く品物を売り付けているからだと言明した。その後彼女は孫娘を万引きに連れて行くことは良くないと考えたとしてその次の日にダッシュ記者の立ち会う中その孫娘にこれ以上盗みはしないと宣言した。その孫娘が「それを守り通すつもり？」<sup>72)</sup>と尋ね返したほどローザ・リーの万引きは孫達にもしっかりと知られていたのである。ダッシュ記者によるとこれは孫達と一緒に万引きはしないとすることであり「彼女が万引きを二度と再びしないと約束している」<sup>73)</sup>ではなかった。彼がこの事を断言できたのはその数週間前にローザ・リーが万引きはしないと約束して入っていった店内で彼女が物を盗んでいるところを目撃し彼女の名前を呼ぶことでそれを阻止しようとした出来事を彼が経験していたからである。その時彼女は「私は私の家族を養おうと努力しているの、それなのに私にはお金がないの。私達は只生き延びようとしているだけなの」<sup>74)</sup>といつものように繰り返しながら万引きを邪魔された怒りを露にし、一方彼は信頼を裏切られたと激怒した。しかし彼は自分自身に対してもその時怒っていたと書いている。「その出来事は私にとっては一つの教訓であった、つまり彼女が私の回りにいる時には普段の彼女とは異なってい儀良くするだろうとなぜ考えたのだろうか？」<sup>75)</sup>と述べている。それは1991年2月の事で1946年に始まり次第に彼女の日常生活の中にしっかりと組み込まれてきた盗みの習慣を彼女が捨てることはほぼ不可能に近い事をダッシュ記者はその時既に悟っていた。一方その盗みの行為が金を稼ぐ手段の一つの選択肢として孫の世代に受け継がれる事にその時彼女がためらいを示した点は彼女の価値観に多少なりとも変化が生じていたと言えるかもしれない。しかし彼女の人生を変える程のものではなかったのも確かである。

ローザ・リーの兄弟や妹達は幼少期に仕付けがしっかりしていなかったことから来るとしても彼女の盗みは度を越していて正当化できないと見なしておりその考え方の相違がローザ・リーと他の人々を分けている点であるとダッシュ記者は暗示している<sup>76)</sup>。そして確かにこの孫に関する出来事が起こるまではローザ・リーはある行動が行き過ぎだとか正当化できるかどうかなどと立ち止まって考えるようなタイプでは無かったと思われる。それが貧困のサイクル脱出に成功する者と失敗する者とを区別するもう一つの要因である。

ダッシュ記者は“the importance and values of personal responsibility”<sup>77)</sup>つまり個人としての責任(義務)の重要性とその価値観が両者を区別する要素であると分析している。それをいかにして養うかが都市部の貧困問題を解決する鍵だとも述べている。これはまさに既に前で述べた下院で可決された「個人責任法」と同じ考えを分けあっておりこれが現行の社会福祉制度に欠陥があると結論づけた人々が手当てを受けとっている人々に対して求めている最低線の、しかし最も重要なものである。アーカンソー州選出の共和党のティム・ハッチンソン下院議員は「人はもし強く健康な体を持っているとしたらそこには基本的な程度の個人的責務がきつとあるはずである。彼等は熟練していないかもしれない、そして彼等は教育が無いかもしれない。しかし我々は

彼等の頼みを聞いてやり永久に彼等を依存状態にしておくことはしない。我々はその文化を変えなければならない」<sup>78)</sup>と述べ貧困のサブカルチャーの存在を認めつつ依存は許さないとする態度をはっきりと示している。福祉に長年、最悪の場合は親の代から死ぬまで依存し続ける人々は社会福祉を悪用する人々であると思なす意見が広く世間一般にあり、彼の意見も多分にそれを反映しているのは確かである。これは1967年以来“workfare”と呼ばれる AFDC を受けている雇用条件に適う人は就学前の子供がいない限りは職業訓練を受けたり働くことを必要条件にしようとした最初の改革の動きを受けている。結局それは連邦政府にしても諸州政府にしても単に AFDC を払うよりも資金が必要であり、福祉行政があまり熱心に労働を促さなかった事もありその成果は余り無かったと言われている。そして88年の家族扶養法により政府は“rescuer of first resort”<sup>79)</sup>つまり「最初に頼れる救援者」としてのそれまでの役割を捨て子供達の親達にその責任を持たせる同様のプログラムを実施したがやはりこれも準備したり実践したりするのに経費がかかりその成果は州によりまちまちであった。その様な改革の動きは多分 AFDC を受けているが比較的教育もあり勤労精神もある上層集団に刺激を与えたかもしれないがローザ・リーの様な読み書きも満足にできない上に手に職もなく、万引き、ヘロイン売買、売春などの犯罪に手を染めてしまっている集団にはほとんど何の変化ももたらさなかったと考えるのが妥当である。そして1950年代、60年代、70年代、そして80年代と AFDC を受けている母親達に働くようにと積極的に促さなかった現行の福祉制度がかえって依存の精神を養い社会人としての責任ある行動についての考え方を徐々に損なってしまったのかもしれない。ローザ・リーにしるパーティーにしる母親の時代から社会福祉手当に依存する生活をしてきた彼女達にとってはその様な生活が既に日常化していて母親と同じ様な道を辿る事に彼女達が少しもためらいを感じることなく受け入れることができる貧困のサブカルチャーが周囲に形成されてしまっているのはこの記事の内容からも知ることができる。周囲にいる同じ様な境遇にいる人々にとっても事態は同じであろう。親が福祉手当を受けていたことが子供も受けることになるまさにその原因かどうかは疑問のままであるとしながらもある調査によると福祉に頼っている家庭の出身でアフリカ系アメリカ人の若い女性の内42%が福祉に頼ることになるそうである<sup>80)</sup>。それ程高い割合で社会福祉依存が継承されている事に改めて驚かないではいられない。

一方個人の責任を求める動きは「何百万人もの社会福祉手当を受けている人々を社会福祉から離れて仕事へと移行させることは可能であるという根本的な前提」<sup>81)</sup>に基づいているが今回クリントン政権下で進行中の改革案は社会福祉手当を受けている間に職業訓練やカウンセリングなどを義務付け仕事を見つけて自活させるだけでなく社会福祉に依存する事を止めさせる為に社会福祉手当を支給に期限を設けると言う強行な策である。単純に社会福祉手当を支給に期限を設ければそれに依存する人々は刺激され、半ば強制されて働くようになるであろうと期待している社会福祉改革案（特に共和党の改革案）はその根本的前提事項自体がまさに貧困のサブカルチ

ヤーの存在に目を向けてはいるだろうがそれについて楽観的に考え過ぎる傾向を示唆していると考えざるを得ないのである。ハッチンソン下院議員は共和党の改革案では社会福祉手当を受けている人は雇用されていようが5年後には手当を打ち切るものであるがそれに働くと言う必要条件を加える事を提案している。彼と彼の支持者達は「雇用されるのが難しい人達には補助金が支給される仕事と仕事の現場での訓練を提供して彼等を手助けする条項」<sup>82)</sup>をそれに含ませるべきで、その様な人々を只切り捨てたりはしないと主張している。それでも「諸州は結局『収入と教育が低くいつまでも失業状態にある雇用され得ないが依然として強く健康な体を持つであろう』極々少数の割合の人々を持つことになるだろう」<sup>83)</sup>と予想している。専門家達はこの期間制限の改革案が実施された場合社会福祉を受けている人々の中で12%から20%の人々が「事実上雇用され得ない人々」<sup>84)</sup>、つまり「極端に劣った技能や精神的よくうつ状態や深刻な健康問題や一般的に混乱状態の生活により妨げられた」<sup>85)</sup>長期に渡って社会福祉に依存している集団が残されると考えている。ローザ・リーやパティの様な人々はこの集団に属するであろう。彼女達の様な集団を貧困から脱出させるためにはその貧困と相互にしっかりと結び付けられている文盲、薬物中毒、そして犯罪問題をも同時に解決しなければならないのはこのローザ・リーの記事がはっきりと伝えている。しかしそれは言葉で述べる程簡単にできることではない。ダッシュ記者も福祉改革をしても薬物売買がなくなるわけでもなく、警察による治安維持を強化したところで文盲は無くならないし職業訓練をしても「なぜ盗むことが悪いのか若い男女に教えたりはしない」<sup>86)</sup>であろうと言っている。それだけ貧困問題には複雑な要素がからまっているのである。

ところでローザ・リーの話に戻ると彼女はボビーをエイズで亡くし、パティは男友達の殺人事件で有罪となり刑務所におり、リチャードとロニーは相変わらず彼女のアパートに転がり込んでいて、ダッキーは窃盗の罪で刑務所に戻っていた。そしてパティの息子は武装強盗の罪で判決を待つ身で、彼の子供、つまり彼女にとっては曾孫をその15才の母親が学校に行っている間世話をしながらローザ・リーは暮らしていると告げダッシュ記者はその記事を締め括っている<sup>87)</sup>。その曾孫を生んだ母親が学校に通っていると言う事実は少なくとも教育が少しは重視される動きが現れ始めたと言えるであろう。そしてローザ・リーは自分自身の為に祈りを捧げ、自分自身を審判しながら暮らしている<sup>88)</sup>とダッシュ記者が書いているがこれも今までとは違った価値観を彼女にとっては遅すぎたとしても持つ可能性を示唆している。そしてこの記事が発表されてから実際に彼女がかつて盗みを働いていた教会に戻り許しを求め、薬物中毒治療センターや教会などで経験談を語りまさに他の人々に彼女の犯した過ちを繰り返さない様に話をした<sup>89)</sup>のである。これが彼女の残された子供達を変えたのかどうかについては言及されていないので定かではないが多少なりとも影響を与えたと信じたい。

最後になるがこのローザ・リーの人生記録はアフリカ系アメリカ人全体に対する否定的な固定

観念に実体を与え、ますますその固定観念を強くさせるかも知れないという恐れがある事を指摘しておかなければならないだろう。なぜならばこの記事を読んでゆくにつれまさにアフリカ系アメリカ人の中で社会の最下層に属する人々が抱えていると世間一般で考えられ論じられている問題点の全てが現実にそっくりそのまま存在しているのが確認されるからである。この連載記事が新聞に掲載された時その新聞社は読者から4,000件以上の電話を受け、その内の約半数がその連載の掲載に賛成していたが、4分の1の電話はその掲載に批判的であった<sup>90)</sup>と報告している。この批判的な人達はまさにこの否定的固定観念に対するマイナスの効果を危惧したからではないかと推測されるのである。それでもやはり都会の社会の底辺に続く貧困状態を理解するのにそれ以上に役立つことだけは確かである。

【注】

- 1) 引用：“Rosa Lee Cunningham, Subject of Series, Dies,” *The Washington Post*, Saturday, July 8, 1995, A1.
- 2) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- 3) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- 4) 引用と参照：“How Perceptions of Race Can Affect Poll Results,” *The Washington Post National Weekly Edition*, June 26–July 2, 1995, p.34. (筆者による翻訳)
- 5) 引用：“Rosa Lee’s Story,” *The Washington Post National Weekly Edition*, October 10–16, 1994, p.16. (筆者による翻訳)
- 6) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- 7) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- 8) 引用：同上, p.17. (筆者による翻訳)
- 9) 参照：同上, p.16. アルビンとエリックに関しては pp.28~30.
- 10) 参照：同上, pp.17~18.
- 11) 参照：同上, p.17.
- 12) 参照：同上.
- 13) 参照：同上, p.16と pp.22~23.
- 14) 参照：同上, p.31.
- 15) 参照：AFDCに関する数値：“Single Women, Fatherless Children,” *The Washington Post*, Thursday, June 29, 1995, A14. 出産に関する数値：*Mother-Headed Families And Why They Have Increased*, Ailsa Burns & Cath Scott, Lawrence Erlbaum Associates, Inc, Publisher, New Jersey, 1994, p.65.
- 16) 引用：“Rosa Lee’s Story,” p.22. (筆者による翻訳)
- 17) 参照：同上, p.23.
- 18) 引用：同上, p.22. (筆者による翻訳)
- 19) 参照：同上, p.32.
- 20) 参照：同上, p.26.

- 21) 参照：同上, p.23。
- 22) 引用：同上, p.30。(筆者による翻訳)
- 23) 引用：同上, p.28。
- 24) 参照：同上, pp.29～30。
- 25) 参照：同上, p.20。
- 26) 参照：同上, p.28。
- 27) 参照：同上, p.23。
- 28) 参照：“Values Program for Teen Mothers Tries to Stop Cycle,” *Los Angeles Times*, Monday, August 7, 1995, A1&A10.
- 29) 参照：*American Social Welfare Policy: A Pluralist Approach*, Howard Jacob Karger & David Stoesz, Longman Publishing Group, New York, 1994, p.265.
- 30) 引用と参照：“Welfare Reform Legislation Highlights,” *The Washington Post*, Thursday, June 29, 1995, A14.
- 31) 参照：*The Social Contract Revised*, D. Lee Bawden, The Urban Institute Press, Washington D.C., 1984, p.131.
- 32) 引用：“Rosa Lee’s Story,” p.31。(筆者による翻訳)
- 33) 参照：AFDC と結婚した夫婦についての数値：“Unhitched but Hardly Independent,” *The Washington Post*, May 13, 1995, A1&A10. 結婚と AFDC の関係に関する数値：*American Social Welfare Policy: A Pluralist Approach*, p.273 .
- 34) 参照：*American Social Welfare Policy: A Pluralist Approach*, pp.282～283 & pp.379～380.
- 35) 参照：*American Social Welfare Policy: A Pluralist Approach*, p.265.
- 36) 引用：“One Mother’s Answer Rejected by Daughter,” *The Washington Post*, Saturday, May 13, 1995, A11.
- 37) 参照：同上。
- 38) 引用と参照：“Unhitched but Hardly Independent,” A1。(筆者による翻訳)
- 39) 参照“Rosa Lee’s Story,” p.26.
- 40) 引用：同上, p.24。(筆者による翻訳)
- 41) 引用：p.24。(筆者による翻訳)
- 42) 引用：同上。
- 43) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- 44) 参照：同上, p.25。
- 45) 引用：同上, p.25。(筆者による翻訳)
- 46) 引用：同上, p.31。(筆者による翻訳)
- 47) 参照：同上, pp.31～32。
- 48) 引用：同上, p.28。(筆者による翻訳)
- 49) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- 50) 引用：同上, p.20。(筆者による翻訳)
- 51) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- 52) 引用：同上。(筆者による翻訳)

- 53) 引用：同上, p.21。(筆者による翻訳)
- 54) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- 55) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- 56) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- 57) 引用：同上, p.17。(筆者による翻訳)
- 58) 参照：同上, p.26。
- 59) 参照：同上, p.16。
- 60) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- 61) 引用：同上, p.31。(筆者による翻訳)
- 62) 参照：同上, p.23。
- 63) 引用：同上, p.19。(筆者による翻訳)
- 64) 引用：同上, p.21。(筆者による翻訳)
- 65) 参照：同上。
- 66) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- 67) 参照：同上, p.19。
- 68) 引用：同上, p.29。(筆者による翻訳)
- 69) 参照：同上。
- 70) 引用：同上, p.19。(筆者による翻訳)
- 71) 参照：同上。
- 72) 引用：同上, p.21。(筆者による翻訳)
- 73) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- 74) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- 75) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- 76) 参照：同上。
- 77) 引用：同上。
- 78) 引用：“Inching Into Employment,” *The Washington Post*, Monday, May 18, 1995, A10.  
(筆者による翻訳)
- 79) 引用：*American Social Welfare Policy: A Pluralist Approach*, p.261.
- 80) 参照：同上, pp.254~255。
- 81) 引用：“Untangling The Web of Welfare,” *The Washington Post National Weekly Edition*, March 13-19, p.8。(筆者による翻訳)
- 82) 引用：“Inching Into Employment,” A10。(筆者による翻訳)
- 83) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- 84) 引用：“Untangling The Web of Welfare.”(筆者による翻訳)
- 85) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- 86) 引用：“Rosa Lee’s Story,” p.38。(筆者による翻訳)
- 87) 参照：同上。
- 88) 参照：“Rosa Lee Cunningham, Subject of Series, Dies,” A12.
- 89) 参照：同上。

90) 参照：同上, A1。

#### 参考文献

- Los Angeles Time*, “Values Program for Teen Mothers Tries to Stop Cycle,” The Times Mirror Company, Los Angeles, Monday Augst 7, 1995.
- The Washington Post*, The Washington Post, Washington D.C.
- “Fulfilling Dreams, Facing Consequences,” Tuesday, December 13, 1994.
- “Inching Into Employment : Recipients’ Pace Doesn’t Fit Reform Scenario,” Monday, May 8, 1995.
- “One Mother’s Answer Rejected by Daughter,” Saturday, May 13, 1995.
- “Unhitched but Hardly Independent,” Saturday, May 13, 1995.
- “Faces of Welfare : Single Women, Fatherless Children,” Thursday, June 29, 1995.
- “For the Region, Challenges in Welfare Reform,” Thursday, June 29, 1995.
- “System’s Rules Carry a Price,” Thursday, June 29, 1995.
- “Two Mother’s Tales : Building a Life, With Welfare’s Aid,” Thursday, June 29, 1995
- “Rosa Lee Cunningham, Subject of Series, Dies,” Saturday, July 8, 1995
- The Washington Post National Weekly Edition*, The Washington Post, Washington D.C.
- “Rosa Lee’s Story,” October 10–16, 1994.
- “Welfare Check, Reality Check,” March 13–19, 1995.
- “Untangling The Web of Welfare,” March 13–19, 1995.
- “The first step off welfare is becoming the fear,” March 13–19, 1995.
- “Where school lunch is a lifeline, not a policy debate,” March 13–19, 1995.
- “How Perceptions of Race Can Affect Poll Results,” June 26–July 2, 1995.
- American Social Welfare Policy : A Pluralist Approach*, Howard Jacob & David Stoesz, Longman Publishing Group, White Plains, New York, 1994.
- Mother-Headed Families And Why They Have Increased*, Ailsa Burns & Cath Scott, Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Publisher, Hillsdale, New Jersey, 1994.
- The Social Contract Revised*,” ed. D. Lee Bawden, The Urban Institute Press, Washington D.C., 1984.